



令和8（2026）年10月14日

校長だより Vol.10

「同じ星を見て歩いていきましょう！R8⑫」 ～ 横綱大の里の『涙』が教えてくれたこと ～

先日幕を閉じた大相撲秋場所で、横綱・大の里関が1年ぶりとなる感動的な復活優勝を果たしました。アマチュア時代から「怪物」と期待され、史上最速で横綱へと順風満帆に上り詰めた大の里関ですが、この1年は度重なる肩の怪我や、一人横綱としての凄まじい重圧に苦しみ、もがき続けた日々でした。

優勝インタビューで彼が流した大粒の涙は、光の当たらない場所で、どれほど孤独に己と向き合ってきたかを物語っていました。類まれな能力に恵まれ、誠実に努力を重ねる彼のようなトップアスリートであっても、物事は一朝一夕に成り立つわけではありません。（R7 校長だより Vol.3 掲載）

むしろ、一度頂点に立った（出来た）からこそ味わう「勝ち続けること、トップであり続けること」の奥深さと難しさがあったはずです。この姿は、私たち清水西高校のこれからの歩みにも深く重なります。

～ 『はなきん』ボランティア ～

本校では、『同じ星を見て歩こう！』という合言葉のもと、『あらゆる場面で礼儀正しい挨拶ができる生徒』の育成を目指しています。今年、この歩みをさらに力強いものにする「素晴らしい変化の風」が校内に吹いています。その一つが、生徒有志が始業前の朝早い時間に行っている「はなきんボランティア」の復活です。本年度、担当の先生の熱意によって見事に活気を取り戻し、第3回目となった先日の「はなきん」では、多くの先生方と、35名の生徒（1年生23名、2年生5名、3年生7名）が参加してくれ、生徒も先生方も気持ちよさそうに雑草取りなどをしてくれていました。参加者はみな感じが良い挨拶が出来ており、自分たちの学校をキレイにしようと頑張る姿に、朝早くからたくさんの元気をもらいました。

～ 一期一会の“縁” ～

私たち教師は異動があります。以前にもお話ししましたが、今年度のメンバーが来年度一人も変わらずに、一緒にお仕事をすることはありません。まさに一期一会の“縁”なのです。そして、だからこそ、学校は『人』で変わります。

今年度着任した先生方は、それぞれキャラクターは違えども、「まずは自らがお手本を示す（率先垂範）」「生徒の心に寄り添う」「褒めてほしい最高のタイミングで褒める」ということを、誰に言われるのでもなく、自発的に実践してくれています。

もちろん、本校には以前から、生徒たちのために日々汗を流し、学校の土台をしっかりと支え続けてくれている素晴らしい先生方がたくさんいます。

その確かな土台（ベース）があるからこそ、新しく加わった先生方の積極的な関わりが、学校生活をさらに好循環させる「起爆剤」として見事に噛み合い、今の学校全体の勢い（活力）を高めるエネルギーへと変わっていると思います。この絶妙な人の“縁”で、清水西高は確実に良い学校になっています。





～ 生徒にどのような姿になってほしいのか ～

校内に響く挨拶が少しずつ明るく、自然なものへと変わりつつあることを、大変心強く思っています。

しかし、大の里関の歩みが教えてくれるように、教育もまた一朝一夕には成りません。

生徒の成長は、昨日出来ていたことが今日は質が下がってしまったり、その逆もあるからです。

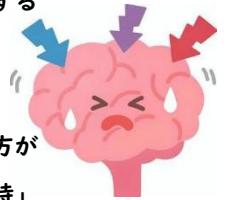
『挨拶』を部活動単位で励行する学校は多くありますが、本校のように、『すべての生徒』に行動様式の質を上げようとしている学校は珍しいかもしれません。ですから、出来ることが増えたり出来つつある生徒は増えていますが、私たちが掲げている目標達成を基準とすれば、『まだまだ』な状態です。

～ 変化とタイミングを見逃さないように ～

そもそも自分を律することは、私たち大人でさえ大変難しいことです。ともすれば、楽な方へ傾こうとする自分（生徒）に、成長するための負荷（ストレス）を掛けなければ（見逃してしまえば）、成長する自分を感じないまま、ただ月日を重ねさせてしまうだけです。

生徒の日常がノンストレスだとしたら、きっと成長はないし、愛校心が芽生えるとは思えません。

生徒が成長するためには、様子を見守り、変化を見逃さずに、必要な負荷を与え、適度な寄り添い方が必要です。「良い時」ばかりではなく、なかなか結果が出ず停滞しているように見える「そうでない時」にこそ、私たちの関り方（タイミング・強弱など）が問われるのではないのでしょうか。



「持続可能な一歩」を毎日淡々と積み重ねるように、私たちの関り自体が『企画側』の視点を持ち、目先の結果に一喜一憂せず、一人ではなく組織全体で取り組むことが大切になります。

授業、クラス、部活動や委員会等。そして、学年を問わず、廊下やグラウンドや体育館等至る所で…。先生方の日常における誠実で粘り強い努力の背中こそが、生徒たちの心の奥底に、目には見えにくくとも決して折れない「底力（生きる力）」を育てていきます。だから、良い時も、何度言っても響かないような苦しい時も、生徒たちの未来の「底力」を信じて、同じ星を見据えて伴走していきましょう。

『西高に来て良かった。』『西高生で良かった。』という実感こそが、愛校心を育むからです。

～ もうひとふんばりしましょう！ ～

生徒は感情のコントロールが難しい年頃です。家族のこと、友達との関係、もしかしたら、私たち教師との関りに悩んでいることもあるはずです。

内面に抱える感情は、必ずしも額面通りに表情に表れません。そっとしておいた方が良い場合もありますが、私たち教師も保護者も、見つけにくいからこそ、目を凝らさなければ見えないのです。

西高の『挨拶』は以前よりは各段に良くなりました。しかし、ここがゴール（目標や限界）なのか。

私たちの願いである「底力（生きる力）」の獲得に、『挨拶』はマスト・タスク（一丁目一番地）です。

だから、大切にしたいし、身につけさせたい。 “もうひとふんばりしましょう！”

